

本興寺だより

令和二年

十月

第二一四号

「人は深く諸々の邪見に入つて 苦を以つて苦を捨てんと欲す この衆生の為の故に 仏は大悲心を起こしき」
(法華経 方便品第二)

「暑さ寒さも彼岸まで」を過ぎ、何時しか朝夕寒さが感じられる時期になりました。季節の廻りは、四季折々の自然の姿を通して人に自然の厳しさも優しさも教えてくれます。私達も、心に四季の如く美しさも厳しさも素直に受け入れて生きることが大切です。

人の人生は心配や苦悩が途切れることはありません。一つのことを気にし過ぎれば夜も眠れなくなることもあります。気持ちを切り替えてみれば、急に自信と安堵の気持ちも湧くこともあります。物の捉え方、心の持ち様によって、苦悩が半分にもなり、また倍にもなります。心が病めば体も病み、体が病めば心も病みます。主体はあくまでも心なのです。心の絡まない純粹な肉体だけの病気はほとんどない、と言われるのもむべなるかなです。

た・面白かった」で過ごせばよいのですが、楽しかったことや面白かったことは過ぎ去れば思い出として残るだけのことで、身につくものではありません。人間として生まれてきてよかったという喜びを心から味わつてこそ本当の幸せであり、人は一つの人生を全うしたといえるのだと。神仏の教えを信じ、行じて宗教的な喜び(法悦)を味わえば、生きがいとして現われ、人生を豊かにし、亡き後も、魂自身に備わった徳として残るのでと云われます。魂の本当の喜びは苦の体験が必要なのです。

それでは不幸とは何か？人は自分の願う幸せが得られない時にそう感じます。人生の体験や経験は、それを全て幸運と不幸の二者択一として捉えれば、好きな事を引き寄せ、嫌なことを避ける生き方を求めることのみで終始することになり、結果として苦悩が増えてくるのだと云われます。

昼と夜が交互に訪れるように、人生の光と闇も必ず交互にやってきました。明と暗・幸と不幸は表裏一体であり分けられないのです。それを分けるから苦が生まれます。幸の中に芽生える不幸の芽、不幸の中に差し込む幸の光が必ずあります。

人は苦から逃れるすべを何時も模索しています。しかし、なかなか苦から逃れられないのは、冒頭の教えのように、苦をもつて苦を除こうとするから思うように除かれないのだと云われます。苦を以つて苦を除く



うえく)の苦しみの一つかもしれない

人間関係の怨憎会苦で嫌な人と共存しなければならぬ時も、コロナウイルスの感染防止をするように、相手の嫌な言葉や行ないに心の距離を保ち、感情の飛沫を避け、余計な一言を飛ばさない心のマスクをすることが同じように大事な気がします。

日々体験する悩みは何故なくならないのか？仏様は説かれます。誰でも人は幸せを求めて不幸を避けようとし、それは幸せとは何か？毎日「楽しかつ



んだ魂を心の底に持っているのです。鏡に汚れた

た像が映つてもそれは日頃の心の像が投影されているだけで鏡が汚れているわけではないのです。それに気付いて心を磨き汚れを除くと云われます。

日蓮聖人は「苦をば苦と悟り楽をば楽と悟り、苦楽思ひ合わせて南無妙法蓮華経と唱えさせ給え」と云われています。例え嫌なこと、辛いことであっても、自分に与えられた課題や試験として、今必要なのだと、現実から目を背けず、正面から受け止めて努力していけば必ず人生に光が差し込んでくるのだと云われています。合掌